

金州城外の作（谷口廻瀾）

父は 明君に 奉じ 子は 親に 奉ず

我 来たつて 憑弔し 涙痕 新たなり

金州 城外 秋 深き 処

坐に 憶う 斜陽 馬を 立つるの 人を

父奉明君子奉親 我來憑弔涙痕新
金州城外秋深處 坐憶斜陽立馬人

解説 作者は、その昔日露の役に乃木將軍の部下の一士官だった頃を思い出して、乃木將軍の「金州城下の作」を思い浮かべながら作った詩であろう。

語釈 ※父ちち乃木希典のこと。 ※明君めいくん明治天皇のこと。

※子こ乃木將軍の子供のこと。 ※奉ほうささげる。

※憑弔ひょうちよう古跡などに立ち寄って昔を偲ぶこと。 ※涙痕なみこん涙が垂れた痕。 ※金州きんしゅう城外じやうがい現在の大連市郊外にある。

※秋深あきふか秋の真つ盛り。 ※坐そざう存在を表わす。 いながらにして。 ※斜陽しゃやう西に傾いた太陽。 日が沈む。

通釈 人の親として將軍は明君に奉じて殉死した。 子は上官の命に奉じて戦死した。 この親、この子を思えば新たに涙が落ちるのである今、金州城外に來れば秋の淋しさも一層身にしみてそぞろに思い出すは將軍が馬を立て、何時までも戰場を見入られている姿である。